

平成二十一年六月一日発行（毎月1回1日発行） 通巻八三三号
昭和二十五年四月三日第三種郵便物認可

火星

平成二十一年六月号



七曜抄 (七)

山尾玉藻

花屑をこぼし纒ほどかれし

花びらを掃き寄せてある夜の土

馬刀突きも昼月も失せゐたりけり

曲る水曲らざる水わさび咲く

やどかりが夕日の前を走りけり

磧草の丈の吹かるる端午かな

花菖蒲めぐりし化粧くづれけり

水ひろきところへ出でし更衣

かたむいて父の佇む牡丹かな

水無月の沙にささる青松葉

太白星

柳生千枝子

菊匂ふ日溜りにみて故郷恋ふ
秋の昼亡き母の声したやうな
馬肥ゆることたのもしく今眼前
美しき馬身眼前肥えてあり
クローバに座れば草の冷たかり
白雲を追ふ草に寝て風は春
靴を脱ぐクローバの丘美しく

杉浦典子

雲雀東風抱かれたさうな辻地蔵
手織機の音のむかうの春の海

波ぎはの鵜の肩張れる春疾風
春日傘鬼の雪隠見にきたる
ひざ折りて寝釈迦の素足拝しけり
扇屋の奥の明るきさくら冷
麩屋町の角のおぼろに僧と会ふ

浜口高子

春一番前歯のひとつぐらつける
四囲の山霞む試飲の赤ワイン
風船に攫はれさうなベビーカー
斑雪山の深くにありし昼の爛
烏雲に土ひと袋買ひにけり
波立てる畳に侍り涅槃絵図
落椿踏みし蹠を持ち歩く

火星作品

山尾玉藻選

亀鳴くとをとこは片手ポケットに
入学の子に校長の喉仏
つちふるや盲導犬の立ち止まる
万蓄につないでありし春の駒
起つとき脚の四本孕鹿
学校の鉄棒に倚る臍かな
土器を湖に放れば古巢あり
鳩一羽潜きし水面春休
涅槃図を拝する若き足の裏
桃の日の余所の仏壇拝しけり
春はあけぼの弥陀の前より掃きはじむ
春障子あけて如来にまみえけり
少年のひとりは素足初燕

大和郡山 城 孝子
八幡 大山 文子
丸山 照子

夕桜シヨールはづして仰ぎけり
花の夜の背負ひ紐のあるチエロケース
砂平ひさかきら榎の花零れけり
竹の秋一村同じ形の屋根
遣り水のたどりつきたる菖蒲の芽
ビル風の六角堂や鳥つるむ
新畳こたつの部屋の暮れかぬる
陽炎やビニール傘が水の底
花冷の床の間にある糸車
ト口箱に氷均さる朝桜
チンドン屋と橋で別れし朧かな
斜に見て大文字山笑ひをり
梅東風に決断すこし延ばしけり
決断のもの種選ぶごと僅か
走り根に力ありけり木の芽風
便せんに残る筆圧鳥帰る
入滅の空をくもらせ桜咲く

宝塚 山本耀子

松井倫子

穴粟 大東由美子

選のあとに

山尾 玉藻

「発句はとり合物也。一二つとり合て、よくとりはやす
を上手と云也」
(松尾芭蕉『篇突』)

この芭蕉の教えを理解することは困難ではない。しかし、全ての会員がこれを正しく実践されておられるかどうか、正直なところ甚だ心もとない。最近、私が句会の席で季語の即き過ぎをたびたび口にするのも、そのような思いに駆られてのことである。しかし即き過ぎ云々は所詮は結果論であり、それを口にする自分を虚しく思い始めている。

二句一章を詠む場合、季語の即き過ぎに留意しないで詠む者はいないであろう。それなのに即き過ぎを指摘された者は大いに戸惑うであろうし、他の季語を選ぼうとしても一度迷い始めると切りがなくなるだろう。殊に初心者には自信を失い、挙句は俳句そのものが解らなくなってしまうのではなからうか。アドバイスのつもりで季語の即き過ぎを指摘しているのだが、そうなればもともこもない。それならばこの難問をお互いにどう乗り越えていけばよいのだろう。実作の観点から改めて述べておきたい。

先ずは、あれこれ理屈で季語を考えず、たまたま其処で眼にした季語や感じとった季語を据えればよい。即ち、偶然の力を借りて詠めばよいのである。但し、そこで安易に手を打

つことを絶対せず、客観的な眼で厳しくチェックをする必要がある。このステップは必ず忘れずに踏まねばなるまい。

苦勞を重ね、それでもなお季語の選択を誤ることがあるなら、これはもう自己の二句一章に取り組む姿勢が根本的に誤っていると考えるしかないだろう。大方の二句一章の作り方は、思い付いた事柄や洒落たフレーズを優先し、それを付加的に季語で飾ろうとするのではなからうか。しかし本来、俳句は季を詠む文芸である。一句の中心は季語でなければならぬし、季語が一句の発想の出発でなければならぬ。そう考えると、「季語を選ぶ」とか「季語の即き過ぎ」などということ自体が本末転倒なのである。

とは言うものの、ここに自然に浮びあがった季語、あちから飛びこんできた季語で、迷うことなく一気呵成に詠み上げることが出来たら、こんなに素晴らしいことはない。尚且つ、その季語に作者以外が口を差し挟む余地が無かったなら、もう最高である。ただこれは句作りの理想であり、そう安易に実現するものではない。結局は、「季語を選ぶ」という傲慢な姿勢を反省し、「季語を賜う」という受身の姿勢に我が身を正さなければなるまい。受身になり切るには、教養や知性、そして感性に頼るのでなく、体で覚える感覚を磨くしか他に道はないようである。

二句一章を正しく捉え直し、季語に対する覚悟を新たにしたら上で、今月の作品を共に味わってみたい。

恒 星 圈

飯塚 糸子

しんがりに木戸開けてあり春の雨
九体寺の灯るに間ある桜かな
み佛に近き椿の焰色かな
桃の花咲ける広場に雀くる
花冷の背広の入りし釣具店

大山 文子

仮宮の辺りもつとも囀れり
大仏の麓見下ろす古巢かな
シヤッターの鳴るたび桜老いにけり
東山見る花守の腰手ぬぐひ
大原女のりヤカー渡る水臈

長田 暉子

花冷の寺に寒山拾得図
くろ谷を歩き疲れし春日傘
枯山水の松の鱗に春の雨
鈴の緒のみつつ並びし涅槃寺
寺の庭馬酔木の花の高きかな

教へ子は女ざかりや初桜
てのひらの葉ふえたり木の芽時
媼には大き花柄春日傘
後ろ手の肩幅広し緋桃咲く
菖蒲園伊勢も薩摩もありにけり

加古 みちよ

一日をゆつくりせよと春の山
ぶらんこへ駆けてゆく子よ躓くな
一台は春の雪置く通勤車
修復のはじまる天守山笑ふ
春泥に残る靴あと小さかり

獅子座

山尾玉藻推薦

前田 忍

鳥曇とき研師の火花かな
葉牡丹の茎立ち風を通しけり
傘と傘重なり合へり種物屋
紅椿落ちし箒目みだれなし

垣岡 暎子

亀鳴くや問診表のはいいいえ
まづ吸ひし息を一気にゴム風船
遠山は雪の気配やお白酒
朧夜の松に巻きあるドンゴロス

竹内 水穂

厩より雀飛び立つ桃の花
船底より人の声する春の宵
下味の酒滲みきたり鐘朧
尼寺にかくれ部屋あり春の昼

松井 倫子

春の昼たひらな水母またぎけり
高層の玻璃の夕焼お白酒
砂風呂へ連れ立てる声朧なる
ゆりかもめ布反すかに発ち遅日

高橋 芳子

若草へていねいに犬放ちけり
啓蟄や塵の分別ややこしく
潮騒に落人の桃咲きにけり
甘酒のフリーズドライ鳥の恋

白数 康弘

竹落葉絶家の墓となりぬたる
ひざまづきをりしは男聖五月
屏風絵の泣き童子なり麦の秋
鉄線の纏れを風のほぐしけり

奥田 順子

坂道の石切さんの紋黄蝶
花影の障子の内の占ひ師
花の朝煙管のこして逝き給ふ
大霞より一筋の銀の川